板ガラスリサイクル・再資源化部会活動の現況と今後の方針

2026年9月17日

（一社）板硝子協会サステナビリティ特別委員会事務局長　伊東弘之

内容

１．（一社）板硝子協会の紹介
２．板ガラスリサイクル・再資源化部会の体制
３．2024-2025年度の板ガラスリサイクル活動報告
４．2025年度板ガラスリサイクル実証実験の報告
５．2026年度からの活動方針

１．（一社）板硝子協会の紹介

一般社団法人　板硝子協会

■事業目的
板硝子産業の健全な発展をはかり、経済の繁栄と生活環境の向上を促し、また国際交流の増進に寄与する。

■沿革

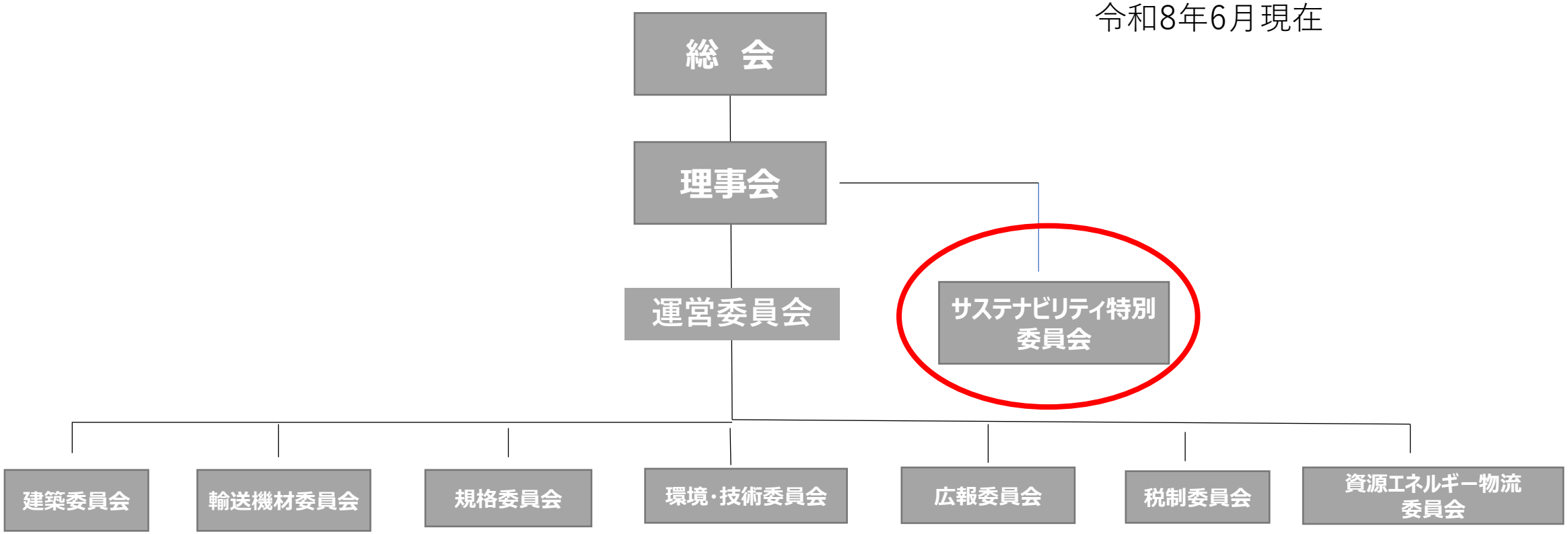
昭和22年	設立
昭和62年	安全硝子普及推進協議会発足
平成 5年	機能ガラス普及促進協議会に改組
平成 9年	板硝子協会50周年
平成10年	第1回板ガラスフォーラム開催
平成12年	ガラス産業協議会（GIC)発足
令和 5年	一般社団法人へ改組

■板硝子協会役員（令和8年6月12日現在）

会長	：森　茂樹	（日本板硝子執行役会長）
副会長	：平井良典	（AGC代表取締役兼社長執行役員　）
副会長	：川瀬将昭	（セントラル硝子プロダクツ代表取締役社長）
常任理事	：吉羽重樹	（AGC常務執行役員）
常任理事	：平健二郎	（日本板硝子常務執行役員）
常任理事	：川北泰三	（セントラル硝子プロダクツ常務取締役）
専務理事	：深川祐一	
理事	：鳴島孝至	（AGC執行役員）
理事	：柚木　宏	（日本板硝子執行役員）
理事	：瀬古雅裕	（セントラル硝子プロダクツ取締役）
特任理事	：伊東弘之	
監事	：塩川智之	（AGC執行役員）
監事	：相浦　宏	（日本板硝子執行役常務CFO）
監事	：岡村真一	（セントラル硝子プロダクツ専務取締役）

一般社団法人板硝子協会　組織図

令和8年6月現在

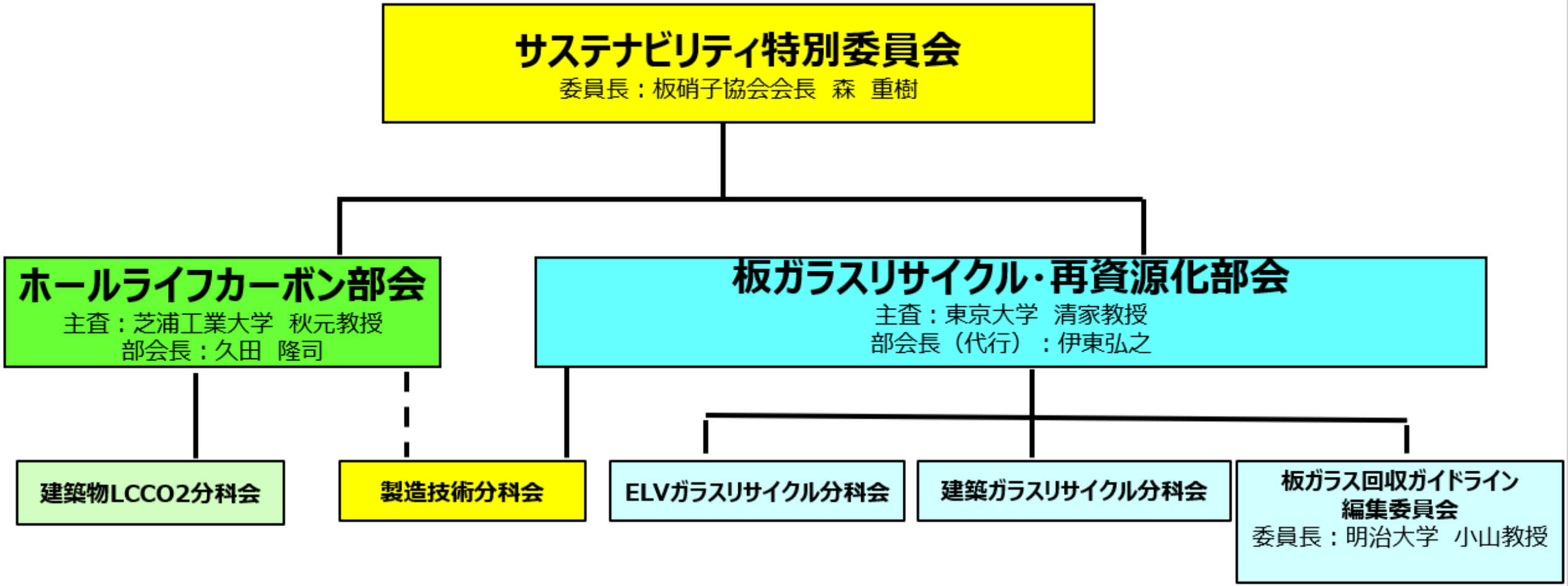


２．板ガラスリサイクル・再資源化部会のミッションと体制

一般社団法人
板 硝 子 協 会
FGMAJ

2026年サステナビリティ特別委員会の組織と体制

2026/4/21現在



板ガラスリサイクル・再資源化部会　名簿

任命	氏名	役職
主査	清家　剛	東京大学大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻　教授・博士（工学）
委員	木本　哲二	ＡＧＣ株式会社建築ガラス アジアカンパニー企画渉外部　部長
委員	井上　伸介	日本板硝子株式会社建築ガラス事業部門日本統括部環境安全部 環境管理グループリーダー
委員	野木　真司	セントラル硝子プロダクツ株式会社建築硝子事業部営業課課長
委員	村井　孝嗣	積水ハウス株式会社ESG経営推進本部環境推進部　スペシャリスト
委員	大久保　英也	大成建設株式会社クリーンエネルギー・環境事業推進本部 資源循環技術部 環境再生・資源循環技術室 室長
委員	安藤　登康	全国板カレットリサイクル協議会　会長
委員	田中　廣	全国板硝子卸商業組合連合会　会長
専門委員	小山　明男	明治大学理工学部建築学科　専任教授　博士（工学）
専門委員	兼松　学	東京理科大学創域理工学部建築学科　教授　博士（工学）
専門委員	磯部　孝行	東京電機大学未来科学部建築学科　准教授
中立委員	斉藤　雅彦	経済産業省製造産業局素材産業課革新素材室　課長補佐
中立委員	葉山　緑	経済産業省GXグループ資源循環経済課　課長補佐（総括担当）
中立委員	山尾　耕平	国土交通省住宅局参事官（建築企画担当）付　企画専門官
中立委員	小河　大樹	環境省環境再生・資源循環局資源循環課資源循環制度推進室 廃棄物規制担当参事官室　参事官補佐

板ガラスをリサイクルする目的

⇒カーボンニュートラル＆資源確保（経済安保）

1.『エンボディドカーボンを極小化する方策』

① ガラス溶融に使用する燃料の脱炭素化 水素燃焼、アンモニア燃焼、電気溶融etc

② **ガラスカレット使用率の向上** ※2

期待される効果　①炭酸塩系原料使用量の削減

②溶融温度の低下⇒燃料使用量の削減⇒排出CO2の削減

2. ガラスカレット使用率の向上のもう一つの効果⇒資源確保と自然保護

① 資源確保　　板ガラスの主要原料である珪砂とソーダ灰は自然から採掘され輸入量も大きい

② 自然環境保護　　既にいくつかの国では珪砂は輸出禁止資源となっている

➡カレット使用率が向上できないと**板ガラスの国内製造に支障**が生じるリスクがある

【注】資源確保と自然環境保護の懸念については現状の具体的リスクの把握はできていない状況にある。
今後の委員会活動を通じて情報の収集と対応の検討に努める

カレット活用で達成する脱炭素と資源確保

一般社団法人 板硝子協会 FGMAJ

ポストコンシューマーリサイクルは板ガラスのエンボディドカーボンを確実に低減する

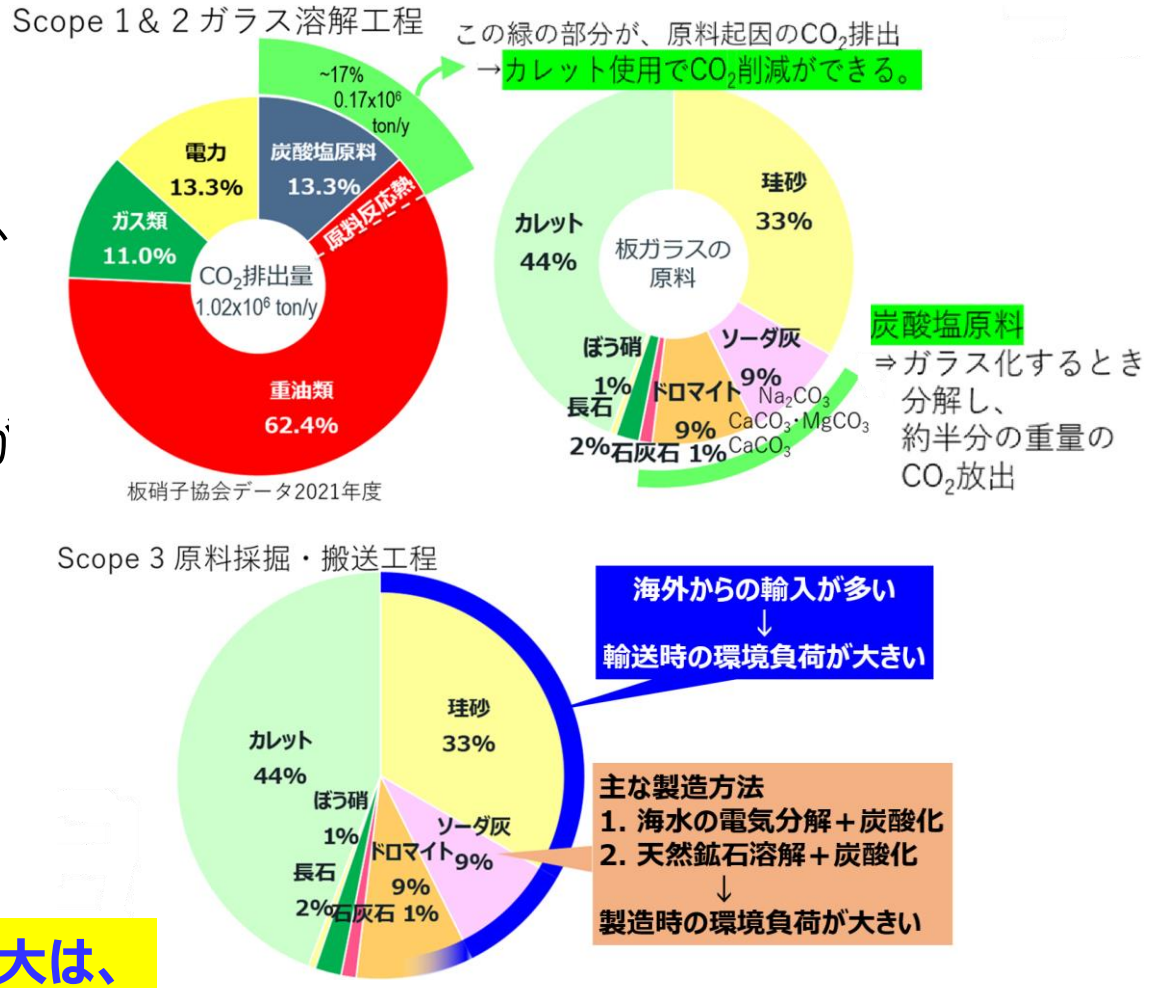
- 板ガラス原料の製造&輸送、板ガラス製造段階の原因起因のGHG排出を削減するために、カレット代替は有効
- 板ガラス業界では、プリコンシューマーリサイクルは進んでいるが、**ポストコンシューマーリサイクルは進んでいない。**

分野別ポテンシャル；

①建築用分野：量は多い(推定資源：70-80万ｔ/年)がその中心の戸建て住宅は現地解体で現在ほとんどガラスは回収されていない

②自動車用分野：自動車リサイクル法により、解体工場に集積(推定資源：10万ｔ/年)も、ASRに。
→2026年度4月インセンティブ制度開始

③太陽光パネル分野：種々の課題に取り組み中



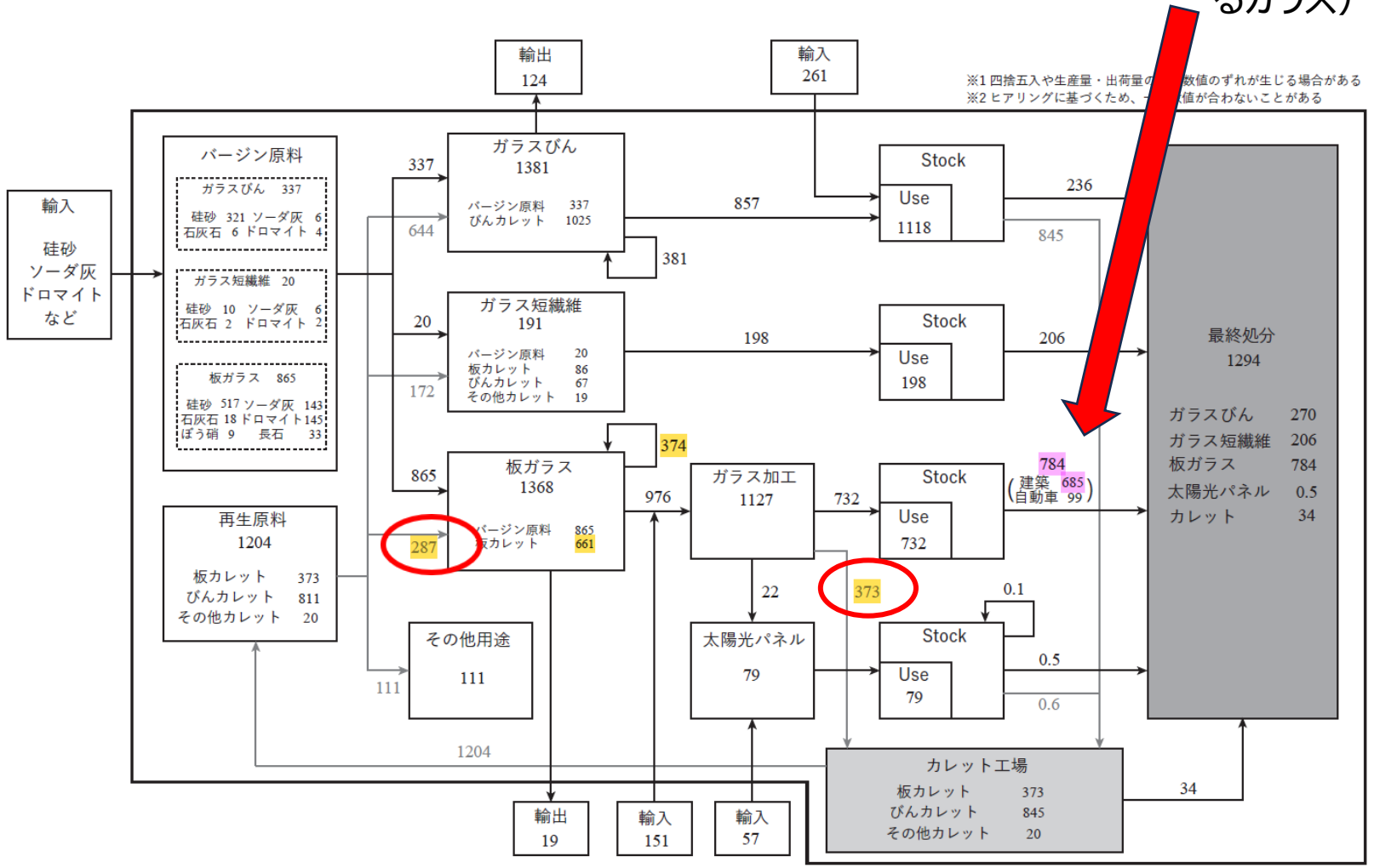
図．カレット導入の効果：原料起源のCO_2排出を低減し、ライフサイクル排出量を削減。

板ガラス製造において、ポストコンシューマーカレット回収の拡大は、カーボンニュートラルと資源確保(経済安全保障)に直結する施策!!

ガラス製品のマテリアルフロー（現状把握）

一般社団法人 板硝子協会 FGMAJ

ポストカレット（解体建築物やELVから排出されるガラス）の使用が不可避



1．東京大学清家研究室調査　2．2021年実績　3．単位：Kton

３．2024-2025年度の板ガラスリサイクル活動報告

3-1　サステナビリティ特別委員会
板ガラスリサイクル・再資源化部会の活動総括

2024年度　“白紙状況”から調査ヒヤリングにより現状を把握

2025年度　課題の抽出と実証実験を通じた解決への方向性や具体案を模索

2026年度　上記にて得られた方向性に従いリサイクルの実践活動を拡大する

3-2　調査・ヒヤリング活動によりわかったこと

一般社団法人 板硝子協会 FGMAJ

①板ガラスリサイクルに関する板ガラス流通業アンケート（2024年８月）

※嘗ての卸会社　　販売店のカレット回収ルートの“消失”

※カレット収集業者の減少や廃業による回収困難地域の拡大

※産廃となった複層ガラス処理の負担増加

②大手建設会社6社ヒヤリング（2024年12月～2025年1月）

※“ゼロエミ”の取組により廃棄資材の分別は進んでいるがガラスは対象外

※建設会社が主体となってガラスのリサイクルに取り組むのは困難　予算・工期

※解体事業者に一括して任せたいがガラスの危険性や取り外しの困難性から忌避されることが多い

③（公社）全国解体工事業団体連合会ヒヤリング（2025年6月）

※解体事業者においてはガラスは“廃棄物”であり、リサイクルを意識づけるには“国”の意思表示が必要

※ガラスの取外しには専門知識が必要であり、安全性の観点からも板ガラス流通事業者が担うことが望ましい

④（一社）不動産協会ヒヤリング（2025年8月）

※板ガラスリサイクルの趣旨は理解するがコスト負担が増えることは課題

3-3　2025年度に達成できたこと

一般社団法人 板硝子協会 FGMAJ

①『板ガラスリサイクルビジョン～ファーストビジョン2025』の発出

⇒“ポストカレット”リサイクル目標量の設定：2030年11万t、2050年30万t



②建築ガラスリサイクル実証実験３件の完遂（2026年1月～3月）

③自動車ガラスリサイクル「J-FAR実証事業」の完了

④複層ガラス解体・分離技術として、すのこ落し破砕装置　を検討俎上に上げることができた。

2025年度板ガラスリサイクル実証実験の個別の報告をいたします

3-4. 2025年度板ガラスリサイクル実証実験の総括

①建築ガラスリサイクル実証実験３件の総括

※適切なガラス取外し作業と分別、保管が実施されれば、建築物から排出される廃棄ガラスのリサイクルは可能

※板ガラス取外し作業コストの負担によっては板ガラスリサイクルは成り立たない可能性大

※回収作業コスト・物流コストの効率化が最大の課題

⇒解体現場等から排出される他の建材との共同回収・物流が必要ではないか

※板ガラスリサイクルの教育・普及活動次第ではガラス関係事業者以外でも板ガラスリサイクルは実施可能

⇒「解体現場等から排出される板ガラス製品のリサイクルを促進するための回収方法ガイドライン」編集

②自動車ガラスリサイクル「J-FAR実証事業」の総括

※サイドライトガラスのリサイクルは可能。但し、分別種類の簡素化が課題

※自動車リサイクル法のインセンティブ制度の適用拡大（フロント・リヤガラス）は必須

※建築用ガラスに利用されるガラスカレットの要求される品質規格により、リヤガラス等一部ガラスのカスケードリサイクルが必要

４．2026年度からの活動方針

4-1　2026年度板ガラスリサイクル・再資源化部会 活動方針（建築用ガラス）

一般社団法人 板硝子協会 FGMAJ

①建築ガラスリサイクル実証実験の継続

②板ガラス流通事業者による自立的リサイクル活動が可能となる仕組み・制度の構築
『ガラス・カレット リユニオン協議会』の発足 ⇒5/25発足

③上記をベースに地域別にリサイクルの実証に挑戦 《方針三本柱》
ア．板ガラス卸会社とガラス販売店の間で板ガラスリサイクルの“流れ”を復活できないか？
⇒“すのこ落し破砕装置”の利用
イ．高層ビルの解体等既にガラス流通がガラスの取外しを担っているケースが多数存在
⇒現状では取外し後、産廃だが、これをリサイクルに廻せないか？
ウ．国や地方公共団体の施設の解体物件、環境政策に積極的な企業の解体物件等からリサイクルの試行を提案、実現できないか？

④「解体現場等から排出される板ガラス製品のリサイクルを促進するための回収方法ガイドライン」
の速やかな完成⇒『ガラスリサイクル診断相談員制度』の早期実現
⇒略称：「回収促進ガイドライン編集委員会」が4/21に活動開始。委員長：明治大学小山先生

⑤板ガラスのGX価値の表示方法について検討を開始する

4-2　2026年度板ガラスリサイクル・再資源化部会
活動方針（自動車用ガラス）

①ELVガラスリサイクル実証実験の実施⇒ガラスリサイクル事業の収益性確保のための分析

②フロントガラス・リヤガラスのインセンティブ制度対象化を目指す

③サイドライトガラス分別の合理化検討

④ガラス取り扱いコンソーシアム拡大のための連携強化